

折に触れ 四字熟語

NO. 17 『尾大不掉』 びだい ふとう

< 意味 > 上に立つ者の勢力が弱く、下にいる者の勢力が強大なため制御できないこと。
尾大きくして掉れず、または、尾大なれば掉れず、と訓読。

< 出典 > 春秋左氏伝「昭公」十一年の一節

『王曰、国有大城何如。対曰、鄭京櫟実殺曼伯、宗蕭毫実殺子游、斉渠丘実殺無知、衛蒲戚実出獻公。若由是觀之、則害於国。末大必折、尾大不掉、君所知也。』

読み下し：『王曰く、国に大城有るは、何如、と。対えて曰く、鄭の京・櫟、実に曼伯を殺し、宗の蕭・毫、実に子游を殺し、斉の渠丘、実に無知を殺し、衛の蒲・戚、実に獻公を出だせり。若し是に由りて之を觀れば、則ち国に害あり。末大なれば必ず折れ、尾大なれば掉はざるは、君の知る所なり、と。』

通 釈：楚王が申無宇という人物に「国中に大城（大きな都邑）があるのは、どうであろうか」と尋ねた。申無宇は「鄭ではの京と櫟という大城が確かに曼伯を殺し、宗では蕭と毫という大城が確かに公子の子游を殺し、斉では渠丘という大城が確かに公孫無知を殺し、衛では蒲と戚という大城が確かに獻公を国外に追い出しております。こうしたことから考えますと、大城というものは国に害をなすものです。末が大きすぎると、その本がきつと折れるし、尾が大きすぎると、その尾を自由に振るい動かすことができないということは、わが君もご存じになっておられることです。」と答えた。

一 言：こここのところ毎日のニュースに、豊洲市場の盛り土、地下空間の問題が取り上げられています。かつての責任者が「知らなかった。盛り土されているものだと思っていた。」と答弁しているのですから、東京都という大組織の尾大不掉ぶりは大変なものだと思います。

参照文献：新釈漢文大系「春秋左氏伝」 三省堂「四字熟語辞典」